駒大生社会連携プロジェクト　ニュースレター

SEED（シード）

Vol.033
2026年1月

今年度の活動期間も残りわずか。各プロジェクトの集大成となる時期がやってきました。今号では、7つのプロジェクトから寄せられた活動報告をご紹介します。

【SDGs部門】経営学部 青木 茂樹 先生プロジェクト

キャップを再利用し達磨を制作！サステナブルなファッションショーを開催！

活動テーマ　サステナブル・アクション・プロジェクト（SAP） の広域展開によるサーキュラー・エコノミーの訴求

〇Green Sports

学内で回収したペットボトルキャップを再利用し、「願いを叶える縁起物」として「達磨」を制作しました。また、学生と地域住民の架け橋となるプロジェクトの第1弾として、学内および駒沢パーククォーターに展示しました。展示場所では駅伝への応援メッセージを募るイベントを併設し、活発な交流の場を創出しました。さらに、総長のご協力のもと開眼式を執り行い、私たちも参列しました。

▲駒沢パーククォーターでの展示

▲開眼式（緑の丘テラスにて）

〇駒コレ

前期から継続して取り組んできた「もったいない服」を減らすプロジェクトが、秋の各イベントで結実しました。株式会社リコー様やリコーブラックラムズ東京様と協力して回収した古着を用い、オータムフェスティバルではフリマとファッションショーを開催。デザイナーの内海健治氏による、制作過程でゴミが出ない「サステナブルバッグ」も披露しました。

また、駒澤ファンタジアではＴシャツをバッグへ作り替えるワークショップやクイズを実施し、多くの方に服の活用法を直接伝えることができました。一連の活動を通じ、捨てない選択肢や服の処分を再考する貴重な機会を提供できました。

【まちづくり・地域づくり部門】文学部 川上 富雄 先生プロジェクト

横浜刑務所への訪問、中央区の民生委員の方々との懇親会を行いました！

活動テーマ　玉川地域を中心とした住民福祉活動への学生参加事業

12月前半に横浜刑務所への見学、中央区民生委員の方々との懇親会を行いました。

横浜刑務所の見学では、精神や知的に課題を抱える「M指標・P指標」の受刑者への支援を学びました。社会復帰が難しいとされる彼らに対し、社会復帰調整官や福祉専門官による専門的な支援に加え、庭の石詰めなど個々の特性に合わせた作業の提供が更生の鍵であることを知りました。また、掲げられている「笑う刑務所」という理念は、笑顔になれる出来事を知ることが再犯防止に直結するという考えに基づいています。一人ひとりに寄り添い、人間性の回復を重視するこの指標の重要性に深く納得しました。

中央区の民生委員の方々との懇親会では、地域コミュニティの現状を伺いました。防災などの町内会イベントへの参加者は着実に増えているものの、住民が「参加者」から「主催者（担い手）」側へステップアップしない点が大きな課題として浮き彫りになりました。地域の交流関係を真に深めていくためには、行政や委員に頼り切るのではなく、地域住民が主体となって企画・運営に関わることが不可欠です。住民主体の地域づくりが、コミュニティ活性化の鍵であることを再認識する機会となりました。

【まちづくり・地域づくり部門】GMS学部　柴田 邦臣先生プロジェクト

門前町でのフィールドワークを通じて被災地域の復興・活性化を目指しました！

活動テーマ　門前町の祭祀再開支援から学ぶ地域復興のフィールドワーク

本プロジェクトは、石川県輪島市門前町において、その文化・社会から学ぶフィールドワークを通じ、被災地域の復興・活性化に寄与することを目的として活動しています。7月、そして12月の活動報告が届きましたのでご紹介します。

7月25日から27日まで石川県輪島市門前町の浦上大祭に参加させていただきました。初めは能登半島の地震があったこともあり、町の人達があまり元気がないのではないかと暗いイメージでしたが、いざ祭りに参加してみると、むしろ私たちに元気をくれるような明るさで、神輿を担いでいるときも助けていただきました。

そんな地域の方々から元気をもらって、一生懸命そして楽しく活動できました。祭りの休憩中でも小さい子どもや同世代の方、お年寄りの方もたくさん話しかけてくれて、コミュニケーションをとるのがとても楽しかったことを覚えています。授業で獅子舞の動画を見ていたのですが、実際にお祭りで拝見させていただいたとき、迫力を感じてびっくりしました。公民館の外や中で休憩しているとき、元気いっぱいのおじいさんに日本酒をもらって友達と飲ませていただきました。バーベキューのイノシシのお肉も美味しかったです。

貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

また、12月13日から14日にかけて門前町で合宿を行い、写真展の運営、思い出を語る会への参加、獅子舞の継承活動の三つに取り組みました。

写真展には、昔の写真や地域の風景を懐かしむ来場者が多く訪れ、展示をきっかけに思い出話が自然と広がりました。

思い出を語る会では、世代を超えた交流が生まれ、地域の祭りや日々の暮らしについて語り合う姿が見られました。

獅子舞の継承活動では、踊りの基本となる「表」と、動きが大きく観客に見せる要素の強い「裏」という二つの型を教わったほか、場面に応じて踊り分けられる複数の型があることも学びました。地域の方々から丁寧な指導を受け、獅子舞の頭を実際に持つ体験も行われました。

今回の合宿は、門前の歴史と文化を次世代につなぐ取り組みの一端を体感する機会となりました。

▲写真展

▲思い出を語る会

▲獅子舞の継承活動

【SDGs部門】医療健康科学部　村田 渉先生プロジェクト
「駒沢ファンタジア」「福島、その先の環境へ」へ参加しました！

活動テーマ　RED-RINGプロジェクト
：持続可能な放射線教育の深化と波及

11月30日に駒沢公園中央広場で開催された「駒沢ファンタジア」に参加し、放射線について楽しく学べる体験型ブースを出展しました。当日は延べ200名以上の方にブースにご来場いただきました。

ブースでは、放射線防護カードゲームを用いて、放射線の種類や身の回りにある放射線との関わり、防護の考え方などを紹介した後、クイズ形式のゲームに挑戦していただきました。

ゲームでは、小さなお子さんから高齢者の方まで幅広い参加者が楽しそうに取り組む姿が見られ、遊びながら学ぶことで自然と放射線への理解が深まっていく様子が印象的でした。

また、参加者に感想を書いてもらうコーナーを設けたところ、「楽しく学べた」「放射線をもっと身近に感じられた」などの声が寄せられました。カードゲームやクイズを通して、多くの方に放射線について考えるきっかけを提供できたのではないかと感じています。

1月10日には、環境省が実施する教育関係者向け現地研修会「福島、その先の環境へ」に参加しました。当日は、東日本大震災・原子力災害伝承館や中間貯蔵施設、中間貯蔵事業情報センターを見学させていただきました。

その後、教育関係者の方々とともに除去土壌をめぐる意思決定型シミュレーション討論ゲーム「DDD Lite」および「放射線量ブラックジャック」を実施しました。

教育関係者の方々にこれらのプログラムを実際に体験いただくのは今回が初めてであり、とても貴重な機会となりました。これからも地域のイベントやさまざまな場を通じて、放射線について「知って、考える」機会を広げていきたいと思います。

【まちづくり・地域づくり部門】文学部 李 妍焱 先生プロジェクト

学生が主体となり、地域の方々を巻き込み複数のイベントを開催しました！

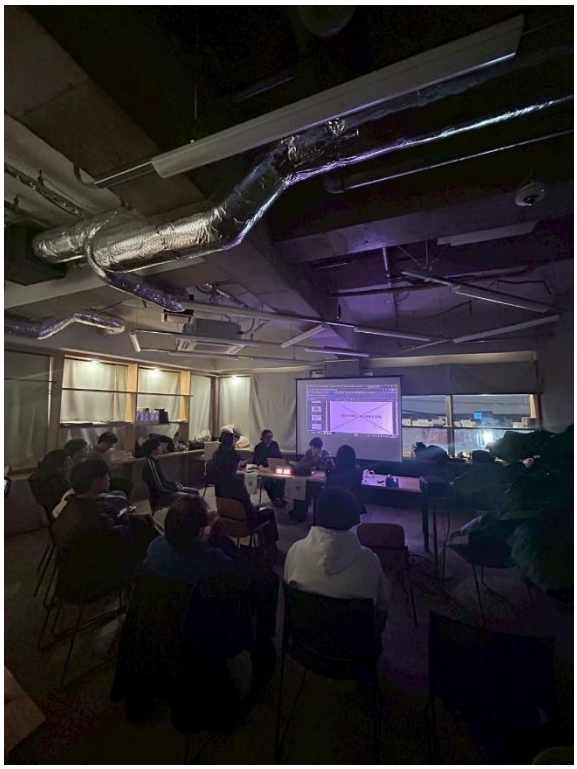
活動テーマ　駒大生が駒沢のまちづくりにおけるコモンズ形成にどう貢献できるか
―「駒沢こもれびプロジェクト」への参与観察を通して

社会連携活動が佳境に入り、地域の人々を巻き込んだイベントを多く実施しました！

「市民主体とは何か」を問うこもれび第1回公開李ゼミに続き、「主体性はデザインできるか」をテーマに、第2回公開ゼミを11月19日に開催しました。
今回は学生による主体的な企画にこだわり、駒沢地域の人と一緒に考えるラジオ番組風の対話イベントとして、「YANYANゼミTOWA RADIO」のネーミングを打ち出しての実施となりました。

NPO法人neomuraの新井佑さんをゲストスピーカーにお迎えし、主体性のあり方について、こもれびプロジェクトのスタッフをはじめ、駒沢地域の方々と本音トークで語り合いました。「主体性はどのようにデザインできるのか」、「仕事と活動のバランスのとり方」、「学生が主体的にまちづくりに関わるためには」などの本質的な疑問をめぐって、新井佑さんの知見をもとに話し合いました。

さまざまな立場や活動を行う人々が集まり、視聴者が一体となって「主体性」について深く考える貴重な時間となりました！ゼミ生が執筆した第2回公開ゼミ記事は、駒沢こもれびプロジェクトのWebマガジン「今日の駒沢」に掲載されているので、ぜひご覧ください！https://comorevi.com/nowadays/12230/



そして嬉しいことに、第1回公開ゼミで対話を行い、石川県の合宿調査でフィールドワークの案内をしてくださった「ぶなの森」の福地さんが、11月23日に実際に石川県から駒沢に来てくださいました！こもれびプロジェクトを訪問し、今度は駒沢のまちづくりについて多く知っていただくことができ、石川県と駒沢でそれぞれまちづくりを行う方が、私たちの社会連携プロジェクトを通してつながりました！

さらに、社会連携プロジェクトの目的、大学生ならではの地域貢献の独自企画として、地域の方々に何かお返しできないかと考えた私たちは、受講した授業の中から自分たちが大好きな人気の授業を、学外に向けて行う「お裾分け講座」を企画し、12月6日に実施しました。絵本に関する授業を担当なさる総合教育研究部の内藤寿子教授のご協力を得て、地域のパパさん及びプレパパさんたちを対象にした絵本の読み聞かせ講座を行いました！講座は、クイズやワークショップ形式で行われ、どんどんと絵本の世界に興味が惹かれていくような内容で、来場者から大好評でした！

いずれの社会連携イベントも、「大学生ならでは」「私たちが主体的に動く」を意識し、準備段階からゲストや協力してくださる先生と何度も打ち合わせを積み重ね、多くの「初めて」にチャレンジして実現できたことです。ゲストや協力してくださった方々には感謝しかありません！現在、李ゼミではこの一年を通して行ってきた活動をもとに、研究で見出したことや連携活動での気付き・学びを研究活動報告書にまとめています。3月の報告会では1年の集大成を発表できるように、報告書の作成を頑張りたいと思います！

【まちづくり・地域づくり部門】経済学部 長山 宗広 先生プロジェクト

「世田谷デジタルものづくりフェス」を開催！企業と連携し、新商品を開発！

活動テーマ　世田谷区の地域資源を活かした アントレプレナーシップ教育の実践

本プロジェクトでは、①「世田谷デジタルものづくりフェス」の企画・実施、②株式会社東果堂と連携した「フルーツ新商品の開発とイベント販売」という2つの活動を行いました。それぞれの活動報告が届きましたのでご紹介します。

【「世田谷デジタルものづくりフェス」の企画・実施】

世田谷区の地域活性化を目的として「世田谷デジタルものづくりフェス」に参加しました。本イベントでは、地域の人々と学生が交流できる場をつくることを目標に、企画から当日の運営、広報まで幅広く取り組みました。

事前準備では、来場者に楽しんでもらえる企画を考え、チラシを小学校へ配りに行くなどの広報活動も行いました。当日は、受付や案内、企画の進行など運営を担当し、来場者がスムーズに参加できるよう心がけました。

実際に地域の方々と関わる中で、イベントを通じて人と人がつながることの大切さを実感すると同時に、事前準備やチーム内の連携の重要性も学ぶことができました。この経験を今後のゼミ活動にも活かしていきます。

【株式会社東果堂と連携した「フルーツ新商品の開発とイベント販売」】

世田谷区に拠点を置く株式会社東果堂と連携し、2026年夏に販売予定のアイスの商品企画および販促物の制作に取り組みました。本活動は、東果堂の事業コンセプトである「美味しく楽しく余す事なく」や、国産フルーツの魅力を日常に届けるというブランドビジョンを理解し、それを学生の視点でどのように形にできるかを考えることを目的としています。

活動の初期段階では、東果堂が出店しているマーケットやケータリングの現場を訪れ、接客補助や商品の陳列、POPの見せ方などを体験しました。実際にフルーツを手に取るお客さんの反応を間近で見たり、岩槻社長からフルーツや生産者への想いを直接聞いたりすることで、教室での学びだけでは気づけない現場ならではの工夫や課題を知ることができました。

その後は、規格外果実を活用したエシカルフルーツアイスをテーマに、ターゲット層や販売シーンを想定しながら商品アイデアを検討しました。特に、私たちと年齢の近い層を意識し、夜中に小腹が空いたときでも罪悪感なく食べられる点を意識して企画を進めました。

また、アイスのパッケージデザインやプロモーション、ノベルティ案についても各自が考え、社長へ提案を行いました。プロジェクトリーダーとして、メンバーの意見をまとめ、全体の方向性を調整することの難しさを感じる場面も多かったですが、チームで一つの企画を形にしていく過程は非常にやりがいのあるものでした。

本プロジェクトを通じて、企業と協働して価値を創り出すことの面白さと、実践を通じて学ぶことの重要性を強く実感しました。この経験を今後のゼミ活動や学びにも活かしていきます。

【産学官連携部門】経済学部 大前 智文 先生プロジェクト

「人を生かす経営」を実践する企業への訪問・ヒアリング調査、駒大生を対象とした働き方・就職に関する意識アンケート調査を実施しました！

活動テーマ　駒大生と中小企業家との連携から「令和における『人を生かす経営』」のあり方を探る

12月4日・5日に「人を生かす経営」を実践する企業への訪問・ヒアリング調査を実施しました。また、12月10日・11日に駒大生を対象とした働き方・就職に関する意識アンケート調査を実施しました。これら活動の成果は、中小企業の「令和における『人を生かす経営』」を分析・考察するための科学的な根拠となります。

■企業訪問・ヒアリング調査

株式会社障碍社様

株式会社障碍社は、企業が障害者を雇用するのではなく、障害者が企業を創り、障害者が中心となり企業を発展させている会社です。パーソナル・アシスタント事業を祖業として、「自由に生きる」という障害者のニーズに対応することから、多くの事業を手掛けるようになりました。

障害者による会社経営あるいは障害者雇用という場面において、「人を生かす経営」がどのように実践されているかを見学、ヒアリング調査しました。そこでは障害の有無にかかわらず、自主的・自発的に働くことが出来る環境が整備されていることが分かりました。

三和電気株式会社様

三和電気株式会社は照明・医療機器・産業装置用コアパーツの開発・製造・販売を一貫して営む企業です。照明用フィラメントやタングステン放電電極の加工・製造の経験をもとにした、微細金属加工技術で業界をリードしています。

製造業における「人を生かす経営」がどのように実践されているかを見学、ヒアリング調査しました。そこでは微細金属加工技術の新たな用途や可能性を追求するエンジニアに加えて、新規のコワーキングスペース事業やインターンシップを通じた製造業の魅力発信など、若手社員が自由闊達に挑戦する姿がありました。

■アンケート調査

若者の働き方や就職に関する意識を調査するとともに、中小企業における「令和の『人を生かす経営』」を検討・考察するための根拠を得るために、駒大生を対象としたアンケート調査を計画・実行しました。なお、本アンケートは駒澤大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会の審査を受け、駒澤大学長の許可を得た上で実施しました。アンケート有効回答は520件を回収することが出来ました。

これを分析することから、駒大生を若者として、その働き方や就職に関する意識の大まかな傾向を把握しました。また、企業側の求人・採用に関するアピール・ポイント、同ウィーク・ポイントと接続することから、若者と中小企業とのミスマッチのあり方について分析・検討を進めています。

■プロジェクト活動の成果報告に向けて

上記活動で得られた成果を基に、中小企業の「令和における『人を生かす経営』」のあり方について分析・検討を進めています。

紙面の都合からこの場では内容を詳細にお伝えすることは叶いませんが、1月28日に岐阜県岐阜市にて社会連携先である岐阜県中小企業家同友会政策委員会向けにプロジェクト成果報告会を実施します。

また、3月14日に令和7年度駒大生社会連携プロジェクト活動報告会に参加します。

●今年度の駒大生社会連携プロジェクトについては、令和7年度「駒大生社会連携プロジェクト」をご覧ください。

●駒澤大学の社会連携に関する最新情報は、社会連携センターのホームページのほか、社会連携センターSNSでも発信中です。フォローよろしくお願いします！

X（@koma_collabo）　Instagram （koma_collabo）

発行：駒澤大学
学術研究推進部
社会連携センター
（2026年1月）

令和7年度 駒大生社会連携プロジェクト

活動報告会

令和7年度「駒大生社会連携プロジェクト」の活動報告会を開催いたします。
今年度の採択プロジェクト9組の学生代表が、活動の成果を発表します。

日　　時　　2026 年 3 月 14 日（土）13：00～16：00
会　　場　　駒沢キャンパス3号館教場（確定次第、左下リンク先に掲載します）

活動報告会の最新情報はこちら　　駒大生社会連携プロジェクトの詳細はこちら

※ 本報告会は、学生・教職員・学外者、どなたでも無料で観覧いただけます。

【登壇予定プロジェクト】

活動テーマ	担当教員
駒大生が駒沢のまちづくりにおけるコモンズ形成にどう貢献できるか ―駒沢こもれびプロジェクトへの参与観察を通して	文学部社会学科社会学専攻 李　妍淼　教授
玉川地域を中心とした住民福祉活動への学生参加事業	文学部社会学科社会福祉学専攻 川上　富雄　教授
駒大生と中小企業家との連携から 「令和における『人を生かす経営』」のあり方を探る	経済学部現代応用経済学科 大前　智文　准教授
世田谷区の地域資源を活かしたアントレプレナーシップ教育の実践	経済学部現代応用経済学科 長山　宗広　教授
世田谷のコモン・スペースを発信するコンセプト映像制作	経済学部　現代応用経済学科 松本　典子　教授
幸せ創造企業を実現するには	経営学部経営学科 村山　元理　教授
サステナブル・アクション・プロジェクト（SAP）　の広域展開による サーキュラー・エコノミーの訴求	経営学部市場戦略学科 青木　茂樹　教授
RED-RINGプロジェクト：持続可能な放射線教育の深化と波及	医療健康科学部診療放射線技術科学科 村田　渉　講師
門前町の祭祀再開支援から学ぶ地域復興のフィールドワーク	グローバル・メディア・スタディーズ学部 グローバル・メディア学科 柴田　邦臣　教授

後援：
世田谷プラットフォーム

しなやかな、意思。
駒澤大學

本件担当：
駒澤大学学術研究推進部
社会連携課
（社会連携センター）